

令和 5 年 6 月 12 日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00528

研究課題名(和文) 批判・ロマン主義・日本的近代 近代諸社会における「文学的なもの」の身分規定

研究課題名(英文) Critique, Romanticism and Japanese modernity: Inquiry into the Status of the Literary in Modern Societies

研究代表者

片岡 大右 (KATAOKA, Daisuke)

慶應義塾大学・商学部(日吉)・講師(非常勤)

研究者番号：30600225

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、「批判」の諸機能の再検討を、「ロマン主義」という歴史的モーメントの再定位との連関において遂行し、かつ、この批判の問題がそれを生んだ近代西欧の外でどのように生きられてきたのかを「日本的近代」の問いを通して考究することで、全体として、「文学的なもの」の近代諸社会における身分規定の変容を、西欧という地平を超えて捉え直す試みとして開始された。4年間の研究を経て、「哲学的芸術」としての米国テレビドラマの台頭、日本のポップカルチャーの歴史的役割、アジアの複数性の問い、デヴィッド・グレーバーの人類学的視野といった観点を導入しつつ、ロマン主義的近代の持つ今日的意義に新たな光を当てることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

フランス・ロマン主義は日本の研究伝統においては周縁化されてきたし、国際的にもある程度は同じことが言える。本研究の出発点には、P・ベニシュエの仕事を踏まえてフランス・ロマン主義の再評価を行い、それがフランス固有の文脈を超え、批判の両義性という近代そのものの問いと深く関わっていることを示すという課題があった。4年間の研究を経て、L・ポルトンスキー、S・ロジエ、D・グレーバーらの理論的成果の導入、加藤周一らを踏まえた日本やアジアの文脈との比較検討等を通し、19世紀フランス文学から21世紀の各国のポップカルチャーまでを貫く共通の問いを浮き彫りにすることができたのは大きな学術的・社会的成果である。

研究成果の概要(英文)：This research is an attempt to reconsider the functions of "critique" in relation to the relocation of the historical moment of "Romanticism", and to examine how problems of critique have been lived outside of the modern West, which generated them, through the question of "Japanese modernity," in order, finally, to investigate transformations of the status of the "literary" in modern societies, beyond the horizon of the West. After four years of research, I have been able to shed new light on the significance of Romantic modernity today, introducing such viewpoints as the rise of American TV dramas as a "philosophical art", the historical role of Japanese pop culture, the question of Asian plurality, David Graeber's anthropological perspective.

研究分野：人文学

キーワード：ロマン主義 批判 加藤周一 デヴィッド・グレーバー セナンクール 小山田圭吾 リュック・ポルトンスキー ゲーム・オブ・スローンズ

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

ポール・ベニシューはそのフランス・ロマン主義研究において、既存の制度的宗教が衰退するなかでの新たな「精神的権力」の探求の諸努力を詳細に跡付け、19世紀における「文学的なもの」の社会的身分規定の変容を見定めた。そこで問題となるのは、社会のただなかに身を置きつつも既存の現実を相対化し、新たなヴィジョンをもたらすという内在的批判の必要性と、そうした批判を担うアクターの所在であった。

近代社会における批判をめぐるこうした問いは、文学研究の外ではとりわけリュック・ボルタンスキーによって探究されてきたが、「社会的批判」と「芸術家的批判」の分離と絡み合いへの注目によって特徴づけられる彼の哲学的社会学は、社会(科)学と文学・芸術研究を架橋しつつ、近代における批判の諸機能をめぐる議論を刷新しうる理論的枠組みを提供している。

西欧における歴史的経験に根ざしたこうした問いは、「西洋の衝撃」のもとに近代化を進める非西洋諸社会において、どのように生きられてきたのか？ 日本においてこの複雑な経験の意義を最も明晰に意識化してきたひとり、加藤周一の仕事は、今なお再検討に値する。

本研究はこうした複数の問題関心を背景とし、ロマン主義以降の近代社会における批判の運命を一般的に跡付けるとともに、そこで「文学的なもの」の社会的身分規定がどのように変容してきたのかを見定め、さらにまた、こうした枠組みが日本に固有の歴史的現実のなかでどのように機能しえたのか、また今後どのように機能しうるのかという問いを探究すべく計画された。

## 2. 研究の目的

本研究は、(1) 近代社会における批判の諸機能を理論的・歴史的に再検討するとともに、(2) そこでのロマン主義というモーメントの重みを見定め、かつ(3) こうした経験との関係で日本的近代の問いがいかに生きられてきたのかを考究することで、全体として、(4) 「文学的なもの」の近代諸社会における身分規定の変容を、19世紀初頭以降の西欧という時空を相対化しつつ再把握することを目的として掲げた。

## 3. 研究の方法

上記「研究の目的」中の(1)は、ボルタンスキーやアクセル・ホネットら、今日的な諸理論の検討を通して行うことが予定されていた。実際の研究期間においては、デヴィッド・グレーバーの人類学的業績を中心的な取り組みの対象のひとつとすることで、この方面の検討にはいっそうの充実がもたらされた。

(2)については、ベニシューのロマン主義論をその知的背景ともども検討しつつ19世紀フランス文学の研究を推し進める一方、その歴史的意義の射程をポップカルチャーを含めた今日の文化的所産のうちに探ることで実現された。

(3)の課題に関してはなにより、従前より取り組んできた加藤周一研究を発展させることが予定されていたが、実際にはそれにとどまらず、一方では鶴見俊輔のような関連する日本の知識人をも論じ、他方では日本以外のアジア諸地域へと視野を拡張することができた。それにより、(4)の全体的な企図ともども、想定以上の豊かな実りが得られることとなった。

## 4. 研究成果

以下、上記の(1)～(4)に即して研究成果を概観する。なお(\*)を付した業績は、後述の刊行予定の単著論集『批評と生きること——「10番目のミューズ」の未来』に収録予定のもの。

(1) 現代フランスを代表する社会学者リュック・ボルタンスキーは、その著作において文学および芸術の経験を重視しているのみならず、自ら詩や戯曲を手掛けるほか、やはり世界的に知られた現代美術家の弟、クリスチャンとの共同作業も行っている。2017年に社会学者アンヌ・ソバジョによる『リュックとクリスチャン・ボルタンスキー』が出たものの、こうした点に注目してリュックの社会学とクリスチャンの芸術を読み直す作業は、まだ始まったばかりだと言える。本研究課題の枠組みで執筆された「人生の時間とその後——展覧会「クリスチャン・ボルタンスキー Lifetime」に寄せて」(\*)は、兄弟の人的ならびに思想的関係に焦点を当てることで、両者双方の仕事の深い理解に寄与することができた。

しかし批判をめぐる理論的アプローチの点では、デヴィッド・グレーバーを繰り返し論じる機会を得たことがなによりも大きい。翻訳『民主主義の非西洋起源について——「あいだ」の空間の民主主義』（以文社、2020年4月）は、訳者解説でも示唆したように加藤周一の「雑種文化」論との比較を念頭に準備したものだが、同書の大きな反響を機に、「未来を開く——デヴィッド・グレーバーを読む」（『群像』2020年9月号）（\*）朝日新聞に寄せた追悼記事（2020年9月16日夕刊）（\*）「デヴィッド・グレーバーの人類学と進化論」（『現代思想』2021年10月号）（\*）「コロナ下に死んだ人類学者が残したもの デヴィッド・グレーバーの死後の生」（岩波書店note「コロナの時代の想像力」、2022年10月）『負債論』刊行10周年を機に日本文化人類学会が主催したシンポジウム（2021年11月6日）への登壇などを行い、道半ばで急逝したこの人類学者の理論的射程を見定める作業を進めることができた。

グレーバーは、一方では「私たちは決して近代的であったことなどない」というブリュノ・ラトゥールの挑発的な問題提起を引き受け、数千年からさらには数万年におよぶ歴史を横断して見出される「人間本性」との関係で今日の諸問題を考察しつつも、他方では、今日にまで続く「近代的」と呼びうる経験があるとしたら、そのメルクマールをロマン主義の成立に求めることができると考えていた（「もうひとつのアートワールド」）。「ポスト批判」のアプローチを提案するラトゥールと異なり「批判＝批評」の社会的意義を手放さない点でも、エドゥアルド・ヴィヴェイロス・デ・カストロとの論争を通し、このブラジルの人類学者が説く「ラディカルな他性」の主張を退けある種の「普遍的」諸価値を擁護する点でも、グレーバーの一連の業績は、本研究課題の成果を今後さらに発展させていくために大いに役に立つ。

なお当初の関心であったグレーバーと加藤周一の比較検討は、日仏会館の民主主義をめぐるシンポジウム（2022年10月8日）で報告した「分裂生成」をどうするか——デヴィッド・グレーバーと加藤周一から出発して」において改めて取り組むことができた。

(2) フランス・ロマン主義研究の分野では、「人間であるとはひとつの党派である」とはどういうことか？——メルロ＝ポンティのスタンダール論を読むために」（『メルロ＝ポンティ研究』23号、2019年11月）「有名性／無名性のゲームとその解体——『アタラ』から『ランセの生涯』までのシャトブリアン」（『立教フランス文学』49号、2020年3月）ワークショップ報告「20世紀のロマン主義論から見たサント＝ブーヴとシャトブリアン」（2022年10月23日）等において、20世紀・21世紀の研究史・受容史を視野に収めつつ研究を進めた。

とりわけ、2つの国際シンポジウムにおけるフランス語報告、「Le roman épistolaire et l'expérience de la hauteur : à propos d'Oberman de Senancour」（「書簡体小説と高みの経験 セナンクール『オーベルマン』について」、京都大学、2022年8月29日）と「Le romantisme chez Paul Bénichou」（「ポール・ベニシューのロマン主義」、立教大学、2023年3月8日）では、前者においては日本における『オーベルマン』の奇妙な受容史およびグレーバーの理論、後者においては従来顧みられてこなかったベニシューと同時代の知識人（ジョルジュ・バタイユやジャック・ラカン）との関係に注目することで、新たな知見を提供することができた。

ロマン主義（および「批判」の社会的機能）の歴史的射程という問題関心との関係で20世紀以降の文化的所産に目を向ける作業としては、しばしば現代日本最高の小説家と評される古井由吉の全体像の刷新を素描する試みを作家没後の記念論集（『古井由吉 文学の奇蹟』河出書房新社、2020年6月）に寄せたほか、「惑星のミサ」のあとで——『ゲーム・オブ・スローンズ』覚え書き」（『文學界』2020年2月号）（\*）「多様性と階級をめぐる二重の困難——HBO版『ウォッチメン』とそのコンテクスト」（『メディア芸術カレントコンテンツ』、2021年6月）（\*）「『鬼滅の刃』とエンパシーの帝国」（『群像』2021年11月）（\*）という一連の論考において、日米のポップカルチャーへの理論的アプローチを企てた。そこではとりわけ、フランスの哲学者サンドラ・ロジエの連続ドラマ論が参照され、目覚ましい質的向上を遂げた今日の米国ドラマのうちに「21世紀の哲学的芸術」を認める彼女の議論の日本の漫画への適用可能性が検討されるとともに、鶴見俊輔（ロジエと同じくアメリカ哲学の研究から出発し、大衆文化の分析を先駆的行った）の漫画論の再検討を加藤周一の日本文化論との関係で再読する必要性が提起された。

(3) 日本の近代の問いとの関係では、従来進めてきた加藤周一研究をいっそう発展させた。生誕100年記念国際シンポジウムでの報告に基づく「非ヘーゲル的な夕暮れへの招待 加藤周一と弁証法」（三浦信孝・鷲巣力編『加藤周一を21世紀に引き継ぐために』水声社、2020年9月）を発表するほか、研究者間のネットワークを構築し、「加藤周一おしゃべりの会／羊の談話

室」(仮称)として、東京大学藝文書院(EAA)と連携しつついくつかの公開企画を主宰することができた。

また、「アジアの複数性をめぐる問い——加藤周一、ホー・ツーニエン、ユク・ホイの仕事をめぐる」(『群像』2022年7月号)(\*)では、加藤の「雑種文化」論を現代中国の重要な哲学者・趙汀陽の「天下」論(ここでは漢民族の「文化的雑種性」が主張される)と比較する一方、加藤の「雑種文化」論が日本とシンガポールや香港の差異の強調を基盤としていたことに注意を促し、シンガポールの現代アーティストホー・ツーニエン、香港出身の哲学者・ユク・ホイの仕事との比較を通し、「西洋」と「東洋」または「アジア」を単純に対立させる見方を相対化すべく努めた。複数性を意識しつつアジア地域に目を向けるという本論考のアプローチは、今後とりわけ中国を重視しつつより発展させていきたいと考えている。

(4)の全体的見通しとの関係では、現在刊行準備が佳境に入っている単著論集『批評と生きること——「10番目のミューズ」の未来』(仮題、2023年秋刊行予定)において、本研究課題の枠内で公表された業績を中心に既発表原稿をまとめ、「デヴィッド・グレーバーを読む」、「作品とともに生きるための批評」、「批評/批判と社会的なもの」、「日本とアジアをめぐる問い」、「歴史の中の生」の五部構成により、これまでの研究成果を一貫した展望のもとに提示する。

なお、岩波書店のウェブ媒体「コロナの時代の想像力」のために執筆された長編論考を書籍化した『小山田圭吾の「いじめ」はいかにつくられたか』(集英社新書、2023年2月)は、この音楽家のスキャンダルという時事的話題を機に著されたものでありながらも、リュック・ボルタンスキーや米国の著名な法学者キャス・サンステイーンを参照し、また「いじめ」をめぐる日本の教育社会学の成果を吸収しつつ、批評/批判と社会の関係を一般的に考察するとともに、1990年代の文化的コンテクストの再構成を試みたもの。このコンテクストが広い意味でロマン主義の文化的枠組みに属するものであることは、同書刊行を機に慶應義塾大学にて開催されたシンポジウム(2023年3月26日)において、「「anarchic romanticism of youth」のあとで」として報告することができた。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計20件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 片岡大右	4. 巻 -
2. 論文標題 『加藤周一を21世紀に引き継ぐために』合評会に寄せて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『加藤周一を21世紀に引き継ぐために』合評会記録	6. 最初と最後の頁 18-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 片岡大右	4. 巻 -
2. 論文標題 長い呪いのあとで小山田圭吾と出会いなおす（3）（4）（5）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 岩波書店「コロナの時代の想像力」	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 片岡大右	4. 巻 -
2. 論文標題 長い呪いのあとで小山田圭吾と出会いなおす（1）（2）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 岩波書店「コロナの時代の想像力」	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 片岡大右	4. 巻 76(11)
2. 論文標題 『鬼滅の刃』とエンパシーの帝国	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 群像	6. 最初と最後の頁 210-228
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 片岡大右	4. 巻 49 (12)
2. 論文標題 デヴィッド・グレーバーの人類学と進化論	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 108-113
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 片岡大右	4. 巻 -
2. 論文標題 多様性と階級をめぐる二重の困難 HBO版『ウォッチメン』とそのコンテキスト	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 文化庁「メディア芸術カレントコンテンツ」	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 片岡大右	4. 巻 75(9)
2. 論文標題 未来を開く デヴィッド・グレーバーを読む	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 群像	6. 最初と最後の頁 331-345
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 片岡大右	4. 巻 -
2. 論文標題 「魔神は瓶に戻せない」 デヴィッド・グレーバー、コロナ禍を語る	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 以文社ウェブサイト	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 片岡大右	4. 巻 -
2. 論文標題 暗黒×IDW×海賊...「啓蒙」の後で何を信じるのか? ランド・ピンカー・グレーバーの戦争	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 講談社現代新書ウェブサイト	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 片岡大右	4. 巻 75(11)
2. 論文標題 追悼 D・グレーバー 「神秘的な、楽しい未来」に向けて : デヴィッド・グレーバーを読み続けるために	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 群像	6. 最初と最後の頁 236-243
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 片岡大右	4. 巻 3467
2. 論文標題 懐疑的に、けれど「とりあえず信じること」 デヴィッド・グレーバーの死に寄せて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 図書新聞	6. 最初と最後の頁 3
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 片岡大右	4. 巻 2020年09月16日夕刊
2. 論文標題 人間の本性、対立超えると信じた 人類学者、デヴィッド・グレーバーさんを悼む	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 朝日新聞	6. 最初と最後の頁 2
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 片岡大右	4. 巻 49
2. 論文標題 有名性/無名性のゲームとその解体 『アタラ』から『ランセの生涯』までのシャトーブリアン	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 立教フランス文学	6. 最初と最後の頁 71-82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 片岡大右	4. 巻 74(2)
2. 論文標題 「惑星的ミサ」のあとで 『ゲーム・オブ・スローンズ』覚え書き	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 文學界	6. 最初と最後の頁 250-260
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 片岡大右	4. 巻 23
2. 論文標題 「人間であるとはひとつの党派である」とはどういうことか? メルロ=ポンティのスタンダール論を読むために	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 メルロ=ポンティ研究	6. 最初と最後の頁 83-102
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14937/merleaujp.23.83	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 片岡大右	4. 巻 3441
2. 論文標題 『ナウシカ』再読 令和の始まりと『ゲーム・オブ・スローンズ』の終わりのあとで	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 図書新聞	6. 最初と最後の頁 1-2
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -



1. 著者名 片岡大右	4. 巻 -
2. 論文標題 人生の時間とその後 展覧会「クリスチャン・ボルタンスキー Lifetime」に寄せて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 以文社ウェブサイト	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 片岡大右	4. 巻 3403
2. 論文標題 加藤周一の第二世紀に向けて 連続する記念年に刊行の三著を機に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 図書新聞	6. 最初と最後の頁 8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 片岡大右	4. 巻 3335
2. 論文標題 現代日本文学の最高峰?	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 週刊読書人	6. 最初と最後の頁 3
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 片岡大右	4. 巻 856
2. 論文標題 二〇一九年秋の回想的断章 非対称性をどうするか	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 図書	6. 最初と最後の頁 14-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 片岡大右
2. 発表標題 非ヘーゲル的な夕暮れへの招待 加藤周一と弁証法
3. 学会等名 加藤周一の知的遺産と世界の中の日本（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 松浦寿輝、堀江敏幸、古井由吉、佐々木中、鹿島田真希、川上弘美、谷崎由依、石川義正、片岡大右、築地正明、小島信夫、吉本隆明、後藤明生、佐伯一麦、島田雅彦、朝吹真理子、柄谷行人、蓮實重彦、川村二郎、古井睿子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 河出書房新社	5. 総ページ数 288
3. 書名 古井由吉	

1. 著者名 三浦信孝（編）、鷲巣力（編）、樋口陽一、ピエール＝フランソワ・スイリ、小熊英二、イルメラ・日地谷＝キルシュネライト、水村美苗、ソーニャ・アンツェン、クリストフ・サブレ、ジュリー・ブロック、山元一、三浦篤、片岡大右、海老坂武、澤田直、西谷修、白井聡、ソーニャ・カトー、奈良勝司、孫歌、池澤夏樹、李成市、林慶澤	4. 発行年 2020年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 456
3. 書名 加藤周一を21世紀に引き継ぐために 加藤周一生誕百年記念国際シンポジウム講演録	

1. 著者名 河出書房新社編集部（編）、赤坂憲雄、安藤礼二、保阪正康、中島岳志、豊島圭介、古川日出男、佐藤究、大澤真幸、杉田俊介、井口時男、中島一夫、石川義正、小泉義之、菅孝行、長澤唯史、赤井浩太、橋川文三、吉本隆明、加藤周一	4. 発行年 2020年
2. 出版社 河出書房新社	5. 総ページ数 192
3. 書名 三島由紀夫1970	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------